

第六十二回

北村季吟顯彰記念俳句集

江戸時代の俳人・歌人・国文学者

北村季吟

(一六二四〜一七〇五)

北村季吟は、江戸時代の寛永元年(一六二四)十二月十一日に生まれ、近江国野洲郡北村(現・滋賀県野洲市北)を故郷とし、俳人・歌人・国文学者として活躍しました。京都で松永貞徳に師事し、三十三歳で俳諧宗匠となりました。優れた門人を育て、松尾芭蕉も季吟から教えを受けています。また、数多くの古典文学の注釈書を著し、「源氏物語湖月抄」はその代表作で、後世に読み継がれています。

六十歳の時、和歌にゆかりの深い京都の新玉津嶋神社の社司となります。六十六歳で、幕府で和歌の指導にあたる初代の歌学方となり、五代將軍徳川綱吉に仕えました。晩年は江戸で過ごし、宝永二年(一七〇五)六月十五日、八十二歳でその生涯を終えました。以後、歌学方は北村家が世襲しました。



北村季吟(イラスト)

※没後二五〇年にあたる昭和三〇年(一九五五)、北村季吟顕彰会が設立され、句碑が建立されました。以後、毎年六月に法要や俳句開巻が行われています。

北村季吟顯彰記念俳句集

北田夏生 選

特選

市長賞

直角に進みて卒業証書受く

甲賀市 田中 みつを

卒業式らしい緊張感が溢れている。「直角」の措辞が効果抜群。若者の未来に幸あれ。

## 議長賞

虫愛づる姫と殿とを野に放ち

野洲市 野崎 藤滋

両親か祖父母が元気な姉弟を野原へ連れ出し遊ばせる。「野に放つ」が傑作！「虫愛づる姫」と堤中納言物語を持ってきたアイデアの勝利。

## 教育長賞

ジャンケンで昇る階春隣

彦根市 秋口 大門

子どもの頃、こんな遊びをしながら寺や神社の石段を昇ったが、今の子どもたちもしているのかなア。

閉じこもっていた冬の季節からの解放感も楽しい。

準特選 五句

葱多め麵は硬めと座りざま

野洲市 野崎 藤滋

日除され窓は景色を失いぬ

野洲市 田中 郁子

畦道は小さき宇宙や犬ふぐり

草津市 山本 絹代

豆を撒く目の位置合はぬ鬼の面

三重県鈴鹿市 古川 和子

笑初め赤子笑へば皆笑ふ

甲賀市 柄川 由紀子

入 選 三十五句

冬ざるる古寺の柱に刀傷

野洲市 野崎 藤滋

丸かじりトマトで汚すワンピース

野洲市 野崎 藤滋

十二月レノン偲びて丸眼鏡

野洲市 野崎 藤滋

朝顔の蒞蓄咲かす親爺かな

野洲市 野崎 藤滋

聞くよりも話してばかり日向ぼこ

草津市 山根 悠翁

作るより育てる心菊展示

野洲市 南井 栄治郎

田の神の眠りて山の眠りけり

野洲市 南井 栄治郎

違ふ姓の表札並ぶ茸飯

野洲市 若木 好

花菜漬女ばかりの昼たのし

栃木県鹿沼市 石川 タミ子

葱坊主淋しくないと遠き子に

長浜市 川瀬 正子

子等遠く大根の花咲かせけり

長浜市 川瀬 正子

紙雛も共に眠むれと雛納め

野洲市 井口 久枝

墓のみの故郷が呼ぶ枇杷便り

野洲市 田中 郁子

卒業式女性校長のネックレス

野洲市 福井 弘一

独り居の暮しに戻る雛納

彦根市 菅生 鈴子

辛口の酒に切りかへ春の宵

栗東市 葛城 巖

百千鳥一羽が翔べば次つぎと

野洲市 川崎 淑子

林間学校星の話しのいつまでも

野洲市 櫻井 雅子

赤の字も介護のあゆみ暦果つ

彦根市 善利 幸子

冬ざるる目鼻剥がれし磨崖仏

野洲市 米野 達彦

菜の花や岸に小さき舟着場

大津市 中西 利元

春眠や老いてなお死は他人事と

富山市 谷 雅夫

ハンモック風やわらかに語り出す

大津市 笠川 壺笠山

母の居てこそその故郷麦を踏む

酒好きで諸子が好きで近江人

花舗の色春を集めて小商い

聞き役に徹してひと日柿を剥く

開き切るのちの淋しさ水中花

誰にでも抱かれゆく子や桃の花

熱爛を提げて同期の慰霊祭

魃を挿す水面に比良の崩れをり

春霞晴れば近し近江富士

かいつぶり落暉反して潜りけり

予報士の零るる笑みや初桜

成るようになるか石榴の呵呵大笑

兵庫県姫路市

多田 純子

野洲市 宮田 絵衣子

栗東市 林 寿世子

湖南市 池谷 百々代

湖南市 池谷 百々代

大津市 木村 君枝

野洲市 吉田 節夫

野洲市 堀尾 晴美

野洲市 南井 耕治

甲賀市 柄川 由紀子

野洲市 三宅 隼人

高島市 饗庭 惠美子



## 総評

テレビ番組の影響か、俳句を詠んでみようという人が増えた事は事実。ところが、いざ取り組んでみると結構約束事があったり、文字や言葉の難しさに出会えば戸惑われる事も多そうだ。そんな事も勉強だ挑戦だと考え、折角の気持ちも萎えさせる事なく脳の活性化に役立てて頂きたい。今回も歴史を刻んだ俳句大会らしい句材の広がりを感じ、新しい表現の作品にも出会い、選の難しさの中で楽しませて頂きました。ありがたいございました。

## 選者吟

キヤッチャーのサインは強気青嵐

野瀬章子 選

特 選

市長賞

祭壇に友のカメラと夏帽と

野洲市 野崎 藤滋

余計な事は言わずさらりと一句に仕上げられている。カメラと夏帽子がすべての事を語りかけている。

## 議長賞

よそ行きもいまは野良着よ大根引く 野洲市 野崎 藤滋

高級なものだけに着ずに仕舞い込み、今となってはそれが野良着になってい  
るのである。とてもおしゃれな方だと思ふ。

## 教育長賞

寒夕焼亡き娘を呼んでみたくなり 大津市 宇野 美代子

逆縁という悲しみを持つ作者だと思ふ。さりげなく詠まれているが奥深いも  
のが句を通して判る。

準特選 五句

鮎跳ねて水の速さの見えにけり

彦根市

馬場

美也子

ふと思う宇宙の無限星月夜

大津市

宇野

美代子

大らかに波打ち返す東風の湖

彦根市

菅生

鈴子

春泥の靴乱れをり子らの声

野洲市

福井

弘一

風邪の子の聞き分けよきが気にかかる

三重県鈴鹿市

古川

和子

入 選 三十五句

近江野は母のふところ草の餅

彦根市 前川 管子

また一つ楽しみ見つけ水温む

米原市 北村 富士子

無情にも夫さらいたり秋の風

米原市 北村 富士子

遊ぶ子の声こだまして日脚伸ぶ

甲賀市 北川 溪舟

せゝらぎも春の音色を浮かべけり

甲賀市 東 美智代

ささやかな家宝飾るや松の内

野洲市 森山 直佳子

聞くよりも話してばかり日向ぼこ

草津市 山根 悠翁

曼珠沙華棚田の景を引き立てる

野洲市 南井 栄治郎

大雪やしばし大地の静まりて

野洲市 南井 栄治郎

葱坊主淋しくないと遠き子に

長浜市 川瀬 正子

川音の確かなりけり目貼り剥ぐ

長浜市 川瀬 正子

また一軒更地となりし暮の秋

たんぽぽや女兒誕生の知らせきて

遅れ来る電車待つ間の春の虹

まほろばの里に夢追ひ紅葉追ひ

もやかかる故山のふもと草青む

便箋はまだ白きまま余花の雨

過疎の里児等の声消え山笑ふ

啓蟄や大地動かす小さきもの

母の居てこそこの故郷麦を踏む

待つといふ心のはづみ春日傘

夕東風やはやも御山に灯の点り

白靴を脱ぎてつかれも解かれゆく

大津市 坂山 陽康

栗東市 内西 喜美子

京都市 なかじま あゆむ

米原市 日比 陽子

日野町 白井 由紀子

野洲市 櫻井 雅子

福井県三方上中郡 内藤 美子

福井県三方上中郡 内藤 美子

兵庫県姫路市 多田 純子

野洲市 宮田 絵衣子

野洲市 宮田 絵衣子

千葉県習志野市 上田 廣

みづうみは平らに暮れて銀河濃し

湖南省 池谷 百々代

たをやかに光散らして初蝶来

湖南省 池谷 百々代

いく重にも水の輪つくり散るめだか

草津市 村松 繁

何処行くも離せぬ帽子木の葉髪

野洲市 三宅 隼人

この人を好きと言える日菖蒲咲く

野洲市 濱田 典子

あの花もこの花も見し花疲れ

草津市 林 和子

二分咲きも心満ちたる桜かな

野洲市 石川 宏二

春風に刻む傘寿の歩みかな

野洲市 石川 宏二

しんしんとほしんと冴返へる

野洲市 石川 宏二

秋深しともしび急ぐランプ宿

長浜市 勝木 岩松

ジャンケンで昇る階春隣

彦根市 秋口 大門

鶯の先ざき啼いて舟下り

草津市 竹内 恵子

総評

第六十二回北村季吟忌にあたり、沢山のご投句を拝見させていただく榮に深く感謝しております。佳句ばかりでその中の幾つかを頂くといいことは大変な仕事です。見落した句もあるかも知れませんが、誤字が多く折角の作品も落さなければならぬということに、今一度お目を通してほしいと思います。

尚一層の精進を祈ります。

選者吟

子らの声飛び交ってみてあたたかし



藤野鶴山 選

特選

市長賞

コホーコホーと去ぬ白鳥やまた会はん 野洲市 竹村 良三

対象は琵琶湖の白鳥であるが、コホーコホーという擬音語が面白く、また、適切な表現となっている。句としては、五・七・五の定形を少しはずれてはいるが、下五の「また会はん」という表現が再来を待つ心を豊かに示している。

## 議長賞

琵琶湖てふ大きな癒しあり小春

米原市 日比 陽子

スケールの大きな一句である。小春のひと日に琵琶湖という存在を大いに享受した作者であった。魚釣りとかヨットとかの一事象ではない。琵琶湖という全体が癒しであると詠んだところが良い。

## 教育長賞

早苗田に胡坐かきたる三上山

野洲市 南井 耕治

「早苗田に逆さ写りして三上」「早苗田に姿写して三上山」なる句は今までに何度も見たが、「胡坐をかく三上」という表現が当地との一体感を表わしていて、稲田と三上山の存在を大きく表わしている。

準特選 五句

青葉蔭胸にクルスのペンダント

野洲市 野崎 藤滋

雪吊のハープの調べ月に哭く

野洲市 石本 美儀

見送りし駅長の挙手花吹雪

栗東市 内西 喜美子

鳥帰るカールブツセの空の果て

富山市 谷 雅夫

釣人の黙に暮れゆく夏の果

湖南省 池谷 百々代

入 選 三十五句

山車の子の演ず濡れ場や春深し

野洲市 野崎 藤滋

十二月レノン偲びて丸眼鏡

野洲市 野崎 藤滋

毛糸編む鶴寿の母の坐に光り

大津市 山本 愛次

手冑に残る匂ひや草螢

大津市 宮崎 正子

田の神の眠りて山の眠りけり

野洲市 南井 栄治郎

語りべの老婆に楳のやさしけり

栃木県鹿沼市 石川 タミ子

帰省客去りて二人の寝正月

草津市 寺井 一二三

白鳥の水裏返し着水す

彦根市 馬場 美也子

頭垂る稻穂に風の重さかな

野洲市 田中 郁子

日本に生れ幸せ花の下

横浜市 岡本 早智子

苦み盛る籠一杯の春を盛る

京都市 なかじま あゆむ

慎ましき暮しくづさず花菜漬

彦根市 菅生 鈴子

山巖の尖る伊吹嶺麦青む

野洲市 宮田 絵衣子

鷺一羽身動きもせず雪の中

野洲市 米野 達彦

コチコチと時計澄み切る雪の闇

近江八幡市 福井 由隆

野洲川の蛇行大きく夏来る

湖南市 池谷 百々代

魎刺して琵琶湖の顔の整えり

野洲市 澤本 満代

虹立つや竹生跨ぎて比良に落つ

野洲市 吉田 節夫

金の鍵投げてヒロイン湖開

野洲市 吉田 節夫

笠智衆背筋伸ばして夏帽子

野洲市 深田 清志

人恋ふるチャルメラの音や寒の月

野洲市 土井 妙子

魎を挿す水面に比良の崩れをり

野洲市 堀尾 晴美

奥宮は山の上なり雲雀東風

大津市 前田 攝子

花冷の一山三井の鐘の音

京都市 大黒 ひさる

初恋を五線にのせて卒業歌

野洲市 吉田 節夫

職去りて傍に妻あり枯野道

野洲市 吉田 節夫

大空を使ひ切ったか揚雲雀

野洲市 三原 満江

守り継ぐ仕来たり重し藤の花

野洲市 山本 志を

日本のころなごます桜かな

野洲市 石川 宏二

秋深しともしび急ぐランプ宿

長浜市 勝木 岩松

長閑さや湖東を巡る熱気球

彦根市 秋口 大門

花石落や埋木舎に茶の一会

彦根市 寺村 澄子

一献の贅に湖国の凝鮒

高知市 吉倉 紳一

薰風や土偶の顔は無表情

草津市 山本 絹代

二胡の音に舞う手の白し風の盆

草津市 福島 翔

総評

江戸時代の一大文学者である北村季吟翁を慕い顕彰して始められた本俳句大会も続き続いて今年で六十二年となります。時代の流れとともに句柄の方も徐々に変化を続け、四季雑詠という兼題の趣旨をよく理解されてバラエティに富んだ投句が見られるようになった事は真に喜ばしい限りです。今後とも益々研鑽努力され、本俳句大会が限りなく発展致しますよう期待申し上げ総評と致します。

選者吟

山車につく紋付袴の佳かりける

俳句選者（五十音順）

北田夏生

野瀬章子

藤野鶴山

（敬称略）

第六十二回

北村季吟顕彰記念俳句集

総投句数 千百三十五句（二百二十七組）  
投句者数 百三十三人

発行日 平成二十九年六月十日

発行者 北村季吟顕彰会

〒五二〇-二三九五

滋賀県野洲市小篠原二一〇番地一

野洲市教育委員会事務局 生涯学習スポーツ課内

TEL 〇七七-五八七-六〇五三

FAX 〇七七-五八七-三八三五

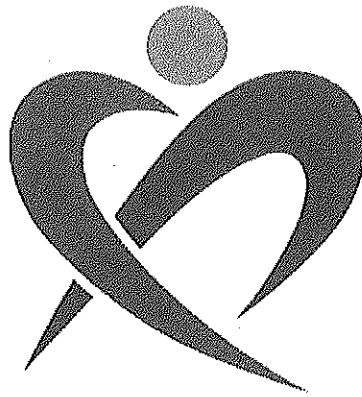
主催 北村季吟顕彰会

共催 野洲市・野洲市教育委員会・野洲市北自治会

主管 野洲市教育委員会事務局 生涯学習スポーツ課

協力 北遊遊倶楽部・北ワイワイレディース（順不同）





### 市章:デザインの趣旨

野洲市の「や」をモチーフに、躍動感溢れるイキイキとした『人』と、ときめきを象徴とした『ハート』を表現しました。  
また、環を表現した2つのラインは、緑が豊かな自然、古典的な色が歴史を意味します。  
それらは互いに交差し、関わり合い、彩られながら、人(ハート)をとときめかせています。

人権を大切にできる野洲のまち (野洲市人権尊重をめざす人権作品より)

～野洲からはじめよう! ストップ温暖化～